

自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.40 寛容は誰に向けた言葉か

KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

SUMMARY

不寛容に不寛容で対抗すれば、最後は破滅に至ります。しかし、不寛容を見過ごす（無関心）ことでは何も解決しません。私たちは不寛容に対してどう対応するべきでしょうか。今起きている差別、暴力、戦争。これらが無い社会を実現するには、私達一人一人が表面上の「寛容さ」でごまかさず、自分の中の不寛容と向き合う必要があるのです。

お知らせ

(2月1日発行)1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場をYouTubeチャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



相手がいてこそその寛容

今、世界中で「不寛容」の嵐が吹き荒れています。ウクライナ紛争、イスラエル・パレスチナ戦争のように日々ニュースのタイトルを飾るような争いから、未だ進行中のミャンマーやイエメンでの内戦、ティグレ紛争など、数年から数十年に及ぶ長い争いも続いています。そのような中、日本の国内は比較的穏やか（社会的な問題は沢山ありますが）ですが、その理由について、「日本人は多神教（八百万の神）だから寛容だ」という説があります。これは、「農耕由来の多神教」と「砂漠由来の一神教」という対比を論じた和辻哲郎を発端に、多くの学者が論じています。

本当に日本人は「寛容」でしょうか。古代の日本が仏教を受け入れ、神道と融合させていた例を考えても、日本人の異文化に関する寛容さは決して低くなく、むしろ高いように感じますが、World Happiness Report 2024などの統計結果を分析すると、日本人の「寛容さ」は世界の標準と大きくはずれているわけでもなく、かといって特別不寛容というわけでもないという状況だそうです。

しかし現在、私達の国は外国人入管問題やヘイ

トスピーチの実態、選択的夫婦別姓導入への課題など人権という観点から見てとても寛容だとは言いえない状況になっています。

この違和感は何でしょう。おそらく誰に対して寛容であるかで受け止め方が違ってくるのだと思います。

世界的な統計の結果がどうであっても、私たちの多くは、寛容は美德だと思っているだろうし、自分もどちらかと言えば寛容な人間だと思っているでしょう。ただそれはあくまで一般論で他人事の時だけに限ります。寛容の問いが自分自身に及ぶようになり、深刻な利害を身の回りに感じるようになると、急に不愉快さを覚えるようになるのです。

寛容／不寛容の概念は、自分ひとりだけでは成り立ちません。必ず他者との関係性で起こるものです。寛容とは自分とは違う行動、信念、身体的能力、宗教、慣習、民族性、国籍などを持つ他者を受け入れることですが、別の言い方をすれば、こうした違いに対して自分の正義を判断基準に相手を正さない、ということです。相手を正さない、とはとても難しいことですから、そうできなかった時（相手を攻撃してしまったとき）には相手に非があるから仕方がなくやった、という「言い訳」が必要になります。また、その許せなかった出来事は道徳的な観点からなのか、社会的な（犯罪など）の観点からなのかといった、別の問題も生じます。寛容が重要な価値であるとしても、その信念や行動が道徳的に正しくないように見えるとき、あるいは社会規範に抵触するとき、私達は相手に対して寛容になれません。

寛容とは自己の不寛容と向き合うこと

「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか？」これは、フランス文学者で評論家の渡辺一夫が1951年に書いたエッセイのタイトルです。

ヘイトスピーチを行う集団に対抗するカウンター（対抗）行動というものがあります。ヘイトスピーチが行われている最中に、それよりも大きな声で中止を叫んだり、相手を攻撃するような言葉を発することで、スピーチの内容が聞こえないように阻止をします。まさに、不寛容に対しての不寛容な行為です。カウンターを行う人たちはただヘイトデモに反対の人もいるということを示しているのですが、あえてそうしているのか、柄が悪く暴力的な印象を持ちます。彼らが主張する通り、いじめられている人がいたら傍観しないで、体を張って止めることはとても大事で、けれどなかなかできない故に共感を得られることも少ないのかもしれない。

こうした行為が本当に有効なのか。渡辺一夫は、「最低の暴力を否定するものではない。しかし、だからしょうがないと流れに身を任せるのではなく、こうした悲しく呪わしい人間的事実の発生を阻止するように全力を尽くさねばならぬと述べています。ただ彼は、その武器となるものは「ただ説得と自己反省しかない」とも述べています。暴力に対し、説得をしようとしても、まったく上手くいきません。この言葉を解釈するために

は私達にもっと議論が必要ですが、例えばウクライナで、例えばパレスチナでの戦争が終わったとしても、そこに至るまでに人を殺した、家族を殺されたという記憶はなくなると考えればやはり不寛容に不寛容であることは正解ではないように感じます。

寛容は英語で「トレランス」。これは我慢、忍耐という時にも使われます。寛容には忍耐が必要なのです。それが渡辺の言う「自己反省」に当たるとするならば、寛容とは他者ではなく、自己に対する言葉だととらえることができます。他人の主張が正しいとは限りませんが、自分の主張も正しいとは限りません。寛容は不寛容に滅ぼされるのではなく、自らが不寛容に陥ることで自滅するのです。

寛容とは、他者に対する態度ではなく、他者と対峙したときの自分を反省する、自己への態度であると考えれば、お互いに暴力に対する暴力、不寛容に対する不寛容ではない解決の仕方がみつかるだろうという希望が生まれます。

〈機関紙「日本再生」No.537の内容〉

機関紙「日本再生」No.536 2024/02/01 発行

ふたつの戦争を抱える世界 危機と災害の時代のなかで

いのちとくらし、を守るために ● 3-6 面/コラム/一灯照隅 ● 7-14 面/困む会/政権交代をあきらめない/馬淵澄夫・衆議院議員 ※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたが考える「寛容」とは何ですか？
- ・あなたは「許せない」と思ったことにどう対応しますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。